



[令和 4 年 8 月 10 日 定例会発表要旨]

手稲溪仁会病院の現在・過去・未来 — 地域基幹病院の役割

手稲溪仁会病院 事務次長 齊藤太嘉男 氏

溪仁会グループは、札幌市内を中心に 4 つの病院・総合健診施設・入所施設（特別養護老人ホーム・介護老人保健施設・ケアハウス・グループホームなど）・在宅介護関連施設（訪問看護・地域包括支援センター・デイサービスなど）を手広く展開する「医療・保健・介護・福祉」を担う複合事業体です。



手稲溪仁会病院は、1987（昭和 62）年 12 月 16 日、現在地（前田 1 条 12 丁目）に 160 床の病院（職員は約 300 名）として開院しました。当時、周辺には JR 手稲駅しかなく、カエルの鳴き声が聞こえてくるだけの、のどかな田園地帯であったと伝え聞いています。初代の理事長・病院長は、「患者主体の医療に徹して、地域に開かれた病院を目指し、高度な医療をわかりやすく提供する」との理念を掲げ、「手稲溪仁会病院に行けば何とかなる！」をモットーに、救急・高度専門医療に特化した病院を目指しました。開院前後は札幌市西区医師会（当時）との軋轢も少なからずあったようですが、地道に関係をつくりながら、地域内の医師・関係者との信頼関係を構築していったのではないかと思います。

その後は増改築を重ね、現在は、670 床・35 診療科を抱える「高度急性期病院」として「24 時間・365 日」の病院運営を行っています。地域医療支援病院・地域災害拠点病院・地域がん診療連携拠点病院・ドクターヘリ基地病院・救命救急センター・臨床研修指定病院など、各種認可も受けました。ただ、度重なる増改築により、院内はさながら迷路のようになってしまいました。来院者の方はもちろん、働いている職員でさえも時には迷ってしまうようなこの環境は、早急に改善が必要とも感じております。



1985 年頃撮影 開院前の JR 手稲駅北口周辺

院内には、手術支援ロボット「ダヴィンチ」や電子カルテをはじめ、最新鋭・最先端の各種システムが配置・運用されています。また、ドクターヘリは年間出動件数 400 件、手術数は年間 9,000 件、分娩件数も 400 件を超えます。それらを支えるスタッフは現在 2,000 名以上おり、医師は約 280 名、看護師は約 900 名、リハビリ担当者約 100 名、薬剤師 60 名など、他院と比較してもかなり多い人員です。



1987 年 12 月 開院当時の手稲溪仁会病院

このような充実した体制がある当院としましては、いろいろなアピールをして、多くの患者さんに気軽に来院していただきたいところですが、実は、国の政策の一つとして「患者さんが大病院に集中しないように」との取り組みがあります。そのため、当院では、完全紹介予約制（ただし、救急対応は除く）をとっております。



現在の手稲溪仁会病院の全容

了した際には、逆紹介として、「かかりつけ医」に再度、診てもらうことになります。その準備として日頃から、ご自身が信頼できる「かかりつけ医」を決めておいてもらうことをお勧めします。

もう一つ大切なこととして、ご自身の考えを持たれることです。マスコミや知人の噂話などからの病院の評判を信用するだけではなく、自分自身の判断で良い医師と出会うことです。インターネットの口コミ情報やランキング本などに左右されるのではなく、ご自身で判断をしてみてください。

今後、日本はますます「超少子化・超高齢社会」に突き進みます。高齢化人口では、札幌市は他の政令指定都市と比較すると 2035 年度にはトップになるとの予測です（高齢人口割合 35%以上）。その中で当院は、最先端の医療と専門性の高い医療を提供し続け、「地域医療支援病院」として、近隣の医療



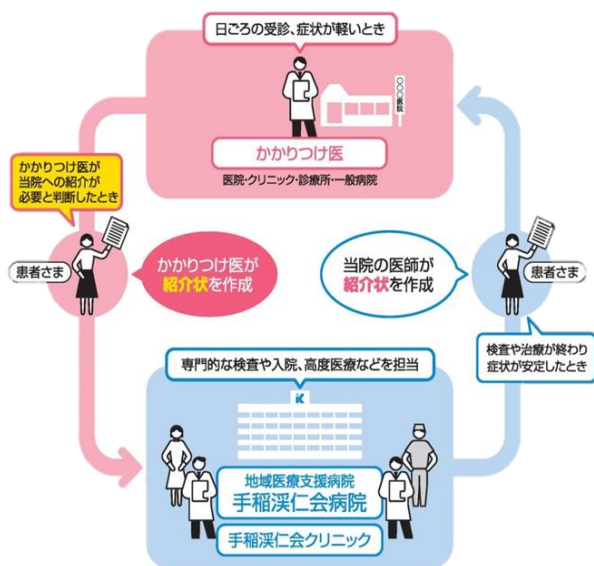
2005年に事業をスタートした
道央ドクターヘリ

機関・福祉施設・関係機関等とも連携を密にしながら、地域医療を支えていきたいと考えております。

地域住民の皆さんにとって、当院には関わりを持たない（入院や手術などの必要がなく、健康であるという意味）ことが一番の幸せですが、不意ながら受診や入院の機会が訪れた際には、当院を信頼していただき、治療・看護を受けていただけたらと思います。

開院から 35 年が経過し、そろそろ将来的な建て替えが院内で話題になっています。これからこの手稲区という地域の中で、当院がどのような体制を構築し、どう展開をしていくべきなのか検討中です。引き続き温かくお見守りください。

今後とも高度急性期医療・地域医療支援につきまして、ご理解のほどよろしくお願いいたします。



紹介・逆紹介の受診の流れ

手稲開村 150 年記念 講演会のお知らせ

次回の定例会は「手稲開村 150 年記念～見る 聞く 学ぶ 手稲の歴史」事業の一環として 公開講座の形式をとります。地域やご友人へのお声掛けをよろしくお願いいたします。

◆とき／10月15日（土）14：00 開会 ◆ところ／手稲区民センター 2階ホール

◆お話／「札幌の地史からみた手稲」古沢 仁 氏（札幌市博物館活動センター 学芸員）

当日は、定員 100 名の先着順です。13：15 より整理券を配布しますので、どうぞお早めに！

● 研究ノート

「留萌沖三船殉難事件」取材の旅

いま私は、故郷で起きた『留萌沖三船殉難事件』を追っています。太平洋戦争の終結から一週間を経た昭和20(1945)年8月22日、樺太からの避難民の引き揚げ船3隻が国籍不明の潜水艦に留萌沖で襲撃され、2隻が沈没、1隻が大破して死者・行方不明者1,700余名が犠牲となった事件のことです。

私の調査を知った手稲郷土史研究会の大沼靖男会員から、「友人の叔父が留萌管内の鬼鹿にいたのだが、遭難三船の『泰東丸』が撃沈されるところを見ていたらしい」との情報があり、取材に行かないかと誘われました。早速快諾し、せっかくだからと三地域の慰霊碑訪問も検討。同行者を募ったところ三國勲会員、釣本峰雄会員、林俊一会員、そして大沼会員と私の5名で行くことになり、遭難77年目の命日の二日後、8月24日早朝、林会員の車で手稲を出発。厚田、浜益経由の海岸周りで、遭難地の慰霊碑を巡り、古老の話も取材できました。

1. 留萌市：樺太引揚三船殉難 平和の碑… 留萌港は、二番目に潜水艦の襲撃を受けた『第二新興丸』が大破して、瀕死の状態



小笠原丸殉難の碑 (増毛町)

で迎り着いたところです。雷撃と砲撃により約400名が死亡・行方不明となっています。旧慰霊碑は山側の千望台にありましたが、平成22(2010)年、黄金岬に建

2. 小平町：三船殉難慰霊之碑… 鬼鹿沖で撃沈された『泰東丸』は小型の貨物船で、避難民・乗組員870名を乗せて小樽港に向かっていましたが、潜水艦の砲撃を受けて沈没。死亡者667名、生存者113名となりました。慰霊碑は、稚内～札幌間の国道231号線沿い、国の重要文化財「旧花田家番屋」の前浜にあって、訪れる観光客も多いようでした。

3. 増毛町：小笠原丸殉難の碑… 『小笠原丸』は逓信省の海底ケーブル施設船でしたが、樺太からの避難民・乗組員700名を乗せて留萌沿岸を航海していたとき、増毛町別対沖において雷撃を受け、一瞬のうちに沈没。638名が死亡、生存者は62名でした。慰霊碑は町営墓地の入口にあり、そばには元同僚によるものという小さな慰霊碑が寄り添っていました。



佐藤政美さん

4. 鬼鹿在住の古老のお話… 小平町鬼鹿にお住まいの佐藤政美さん(92歳)は、終戦当時15歳で鬼鹿市街の裏山(通称「酒屋の山」)にある「防空監視哨」の監視員をしていました。備え付けの20倍双眼鏡を覗いていると、午前9時半過ぎ、潜水艦が避難船に砲撃を加えているのが確認できたそうです。まもなく船は沈んでいきましたが、どうすることもできず、救助しようにも潜水艦が怖かったといいます。

——『留萌沖三船殉難事件』の貴重な証言を伺うことができ、また途中、雄冬岬の景勝地「白銀の滝」にも立ち寄るなど、有意義な取材の旅となりました。



樺太引揚三船殉難 平和の碑 (留萌市)



三船殉難慰霊之碑 (小平町)



鬼鹿市街の裏山

鈴木清士 (手稲郷土史研究会 相談役)

【つれづれ随想】

私の“手稲式土器”制作記 ②



切り弓で縁を整えた土器

オリジナル手稲式土器制作の挑戦開始から約一時間、粘土を深鉢状に形成し終えました。次は、切り弓という道具で、その縁を整えていきます。こうして、縄文土器らしい特徴を備えたカタチができあがりました。最後は、いよいよ表面に文様を施していきます。

インターネット検索で出てきた画像をもとに、おそらくは土器制作に用いられたであろう技法を、見様見真似で試みました。縄を粘土に押し付けて文様を、針とヘラで線刻を作ります。短く細い棒状に作った粘土を水で溶かした粘土（どべ）で密着させて、土器の表面にヘラで押し付けた立体的な装飾飾りもためしてみました。時間の都合で細かな文様の制作まではできませんでしたが、実際の縄文土器は相当な時間をかけて作られたのだろうと想像しました。

陶芸の先生の丁寧なご指導のもと、約二時間をかけて、ようやくオリジナル土器が完成しました。陶芸は小学校の図画工作の授業以来。久々の粘土遊びのような感覚に、楽しさと懐かしさも感じることができました。

一月後、焼き上がり完成した素焼きのオリジナル手稲式土器を受け取りました。縄の文様は、押し付けが弱かったのかうっすらとしか出ませんでした。線刻と立体的な装飾飾りはくっきりと表れていて、縄文土器らしく制作できたように思います。私の土器は、出土したものよりはるかに小さいサイズですが、完成までの工程を追体験したことで、かつて存在したであろう土器職人の思いも少しだけ感じられました。次回制作の際にはインターネットに頼るのではなく、手稲式土器の実物が展示されているという札幌市西区の札幌市手稲記念館、中央区の札幌市埋蔵文化財センター、江別市の江別市郷土資料館などへ足を運び、現物をじっくりと見たうえで、再度挑戦してみたいと考えています。

また、今回、手稲式土器について調べてみてわかったのは、手稲式土器は手稲区内で実際に見られる場所がほとんどなく、認知度がとても低いことでした。手稲式土器は、北海道において土器の制作年代を知るための指標とされている重要な土器であるということ、多くの人に認識してほしいとも思いました。手稲式土器に接する機会がもっと増え、その史的価値が広く知られるようになっていけば、「手稲区といえば、スイカ、カボチャ、ていぬ、そして手稲式土器！」といわれる未来もあるのではないのでしょうか…？

岡和田 夢子（手稲郷土史研究会 会員）



完成したオリジナル手稲式土器
(タテ 80mm・ヨコ最大 105mm)

見る聞く学ぶ手稲の歴史

★手稲開村150年記念事業のスタッフ募集

2022/10/15 (土) 14:00 開会

2022/12/10 (土) 14:00 開会

2022/10/28 (金)～11/6 (日)

主催 手稲郷土史研究会
共催 札幌市手稲区
会場 手稲まちづくりセンター
札幌市埋蔵文化財センター

★手稲開村150年記念事業のスタッフ募集 手稲郷土史研究会主催による『見る聞く学ぶ手稲の歴史』がいよいよ始まります。①講演会Ⅰ…10月15日(土)、「札幌の地史から見た手稲」古沢仁氏(札幌市博物館活動センター 学芸員)。②講演会Ⅱ…12月10日(土)、「手稲開村150年を思う」茂内義雄氏(郷土史家)。いずれも手稲区民センター2階ホール、各回先着100名、13:15整理券配布、14:00開会。③パネル展…10月28日(金)～11月6日(日)、JR手稲駅自由通路「あいくる」、まちの歴史紹介パネル・写真帳の中の「昭和の手稲」ほか展示。については、運営をお手伝いくださるスタッフを募集します。講演会の設営・受付・誘導などについては当会の研究部長へ、パネル展の設営・管理当番・説明要員については広報部長あてお申し出ください。